

# 言語文化の持続性の感覚を直に獲得する古典教育へ

## —生涯教育との連携を視野に入れて—

坂東 智子\*

Toward a Classical Education that Directly Imparts a Sense of  
the Enduring Nature of Language and Culture

BANDO Tomoko\*

(Received September 26, 2025)

本研究は2017年からの継続研究の成果を、市民夏期講座に援用実施した報告をするとともに、これまで小中高の学校教育での古典教育の意義や可能性を追究してきた筆者の研究を生涯教育に展開し、そこから学校教育への示唆を得るという逆方向からの可能性や方向性を探る試みである。言語作品としての「古典を読む、古典に親しむ」意味や価値は大きく2つある。現代を相対化する視座を得ることと、現代語とは異なる古語や古典の文体の魅力を知り、現在の言語生活を豊かにすることである。加藤周一は、「自分たちの文化の歴史的な持続性の感覚」は、古典を原文で学ぶことに限って獲得される感覚であると述べている。筆者もこの考えに拠る。本稿では、筆者が実施した市民夏期文化講座を対象に、これまでの研究成果を生涯教育に生かし、受講者の言語生活にどのように寄与したのかを明らかにした。

### はじめに

本研究は2017年からの継続研究である。言語作品としての「古典を読む、古典に親しむ」意味や価値は大きく2つあると考えている。現代を相対化する視座を得ることと、現代語とは異なる古語や古典の文体の魅力を知ることである。認識力、思考力の育成とともに、言語感覚や言語化能力、言語運用の力を育成する「場」としての古典を学ぶという捉えである。

これまで筆者は大学の共通教育や専門教育の授業だけでなく、看護学校での「文学と看護」の授業等も担当してきた。古典作品を学び、「楽しんで読んだり書いたりする」経験は、小中高の学生だけでなく看護を学ぶ受講者にとっても意味のある学びを生成することを報告してきた。今回はそれに加えて、市民夏期文化講座での実践を取り上げ分析考察を行なう。

手法としては、これまででも理論化と実践化、またその往還による改善を重ねてきた、古典の原文と絵画などの視覚的資料を対照させながら読むことを採用した。

なぜ原文だけでなく絵画と対照させながら読む必要があるのか。言語作品を読むことと絵を見ることは、理解

の仕方が異なっている。絵画は言語と違って、場面や雰囲気、人物像を直観的、全体的に理解できる表現形式である。一文一文線状的に表現されたものから読み手が意味生成、再構成して場面や状況を理解していく言語表現とは理解の仕方が異なっている。ここに原文だけでなく、物語絵と原文を対照させながら読む意味がある。

今回の市民講座では、これまで古典は古典、現代文は現代文として別々に扱ってきた作品を、「言語文化の持続性を直に獲得する」ことを主眼として、連続した流れとして扱うことを試みた。これまでの学校教育での実践研究と大きく異なる点である。これまでの研究成果を活かすと同時に、逆方向からの新たな示唆を得たいと考えている。

### 1. 小松島市夏期文化講座「短歌」実施概要

小松島市文芸協会から令和6年から3年間の夏期文化講座「短歌」講師の依頼があった。すでに実施した2年間の概要を以下に示す。

\* 山口大学教育学部, 〒753-8513 山口市吉田1677-1, t.bando@yamaguchi-u.ac.jp

(1) 令和6年度：講座名「和歌と短歌はどう違う」

実施日：令和6年8月5日。

場所：小松島市中央公民館。

参加者：14名。

講座の骨子として示したものの2点：

- ① 現代短歌の多様性（素材、表現（ことば）、内容、表記）は、和歌から近現代短歌へという大きな流れの中で、特に戦後の前衛短歌運動の影響が大きいと考えられること。
- ② 現代短歌は1300年の歴史をもつ短詩型文学であり、和歌から続く伝統と短詩型文学に対する否定論とのせめぎ合いを背景として生き延びてきたものであること。

(2) 令和7年度：講座名「源氏物語と和歌」

実施日：令和7年8月5日。

場所：小松島市中央公民館。

参加者：28名。

講座の構成は、前半・後半の2部構成とした。

前半：『源氏物語』の作中和歌から、第1部、第2部の構成を俯瞰的に捉える。

後半：『源氏物語』の作中和歌を踏まえて、新しい和歌が詠まれ、新古今和歌集の代表的な技法となったことを具体的に理解する。

参加者は、2年目は1年目のちょうど2倍となった。これは、源氏物語という語が題目に入った影響が大であると推察される。市民講座のため、参加者の年齢層が高く、特に「短歌」講座であるため、実際に短歌作りを行っている人の割合が高い。中には源氏物語だけでなく、古今集や伊勢物語といった古典作品の勉強会を行い熱心に参加している人も一部にはおられた。現代短歌だけでなく、古典和歌や古典作品に日頃から興味関心を持っている人にとって、2年目の題目「源氏物語と和歌」の方がインパクトが強かったのである。生涯教育では、古典を学びたいというコアな層が存在している。ここが、興味が無く、関心もなく、学びたいとは思えない学習者がほとんどの、学校教育における古典の学びとは大きく異なるところである。

1. 令和6年小松島市夏期文化講座実施内容

(1) ウオーミングアップ：次の短歌の（ ）にことばを入れてください。

資料1 空欄補充の課題

カップ焼きそばにてお湯を切るときにへこむ流しの（ ）しらべ 松木秀

○松木さんは、「かなしき」を入れています。

○この歌からどんな状況、場面が想像できますか？

○「ひとりぼっち」「家族と離れ一人暮らしをはじめたばかり」「下宿の流しは安物だな」「思いがけないほどに大きな音で正直どつきとした」などなど。

○どう考えても、昭和以降の歌。

○そのくせ、「かなしき」という文語を使っています。

(2) 時代による「かなし」歌の違い

資料2 平安、明治、平成の「かなし」の歌

A	明日知らぬわが身と思へど暮れぬ間の今日は人こそ悲しかりけれ（平安）
B	白鳥は哀しからずや空の青海のあをにも染まずただよふ（明治）
C	カップ焼きそばにてお湯を切るときにへこむ流しのかなしきしらべ（平成）

同じ「かなし」でも、時代によって随分と使い方が違っていると思いませんか？こんなことを手がかりにして、古典和歌から現代短歌への短歌の歴史を見ていこうと思います。

(3) 明治から平成までの短歌を並べ変える

明治から平成までの8首をランダムに示し、古い順に並べ変えて一番いいと思う歌を選んでもらった。

資料3 課題 8首を古い順に並べかえる

YAMAGUCHI UNIVERSITY

**課題① 一番いいと思う歌を選ぶ。**

2022年度は、次のような結果でした。(90名回答)

①終バスにふたりは眠る紫のく降りますランプ>に取り囲まれて	37名
②あなたは勝つものとおもつてみましたかとおいたる妻のさびげにいふ	10名
③マッチ擦るつかのま海に霧ふかし身捨つるほどの祖国はありや	9名
④牛飼いが歌詠む時に世のなかの新しき歌大いに起る	1名
⑤日本脱出したし 皇帝ペンギンも皇帝ペンギン飼育係も	9名
⑥その日からきみみあたらぬ仏文の 二月の花といえヒヤシンス	2名
⑦産むならば世界を産めよもの芽の湧き立つ森のさみどりのなか	4名
⑧自転車のカゴからわんとはみ出してなにか嬉しいセロリの葉っぱ	18名

2022年度は③を選んだ人が例年より多く、④が例年より少ない結果でした。毎年、⑧が不動の一位で、2019年度は①と1票差でした。ついに、2021年度から①が1位、⑧が2位と逆転しました。今年も①が1位。⑧のダブルスコアとなっています。①が穂村弘さん、⑧が俵万智さんです。①が一番新しい平成の歌となります。

資料3は、2022年度に筆者が実施した山口大学共通教育授業での回答結果である。大学1年生90名に調査した。2021年度までは、⑧の俵万智さんが1位であったが、ついに2022年度から①の穂村弘さんが1位となり以後はそれが続いている。

この課題の後で、④「牛飼いが歌詠む時に世の中の新しき歌大いに起る（伊藤左千夫、明治33年）を取り上げて、和歌から短歌と呼び名が変化したことを解説した。

(3) 「和歌」から「短歌」へ

近世までは和歌。明治33年(1900)に「短歌」と呼び名が変わった。31音の定型であることは同じ。

資料4 なぜ近代になって「短歌」になったか？

- 佐佐木信綱、与謝野鉄幹、正岡子規らの和歌革新運動が原因。
- 当初、旧来からの歌を「旧派和歌」、自分たちの新しい歌を「新派短歌」と区別していた。
- 次に、旧来の世界と決別するために「和歌」という呼び方を廃して「短歌」を使うようになった。

その後、伊藤左千夫は、正岡子規主宰「根岸短歌会」の中心歌人であり、正岡子規の弟子であったこと。子規の言葉(資料5)を示して、左千夫の歌と併せて読むことで、明治の和歌革新運動によって「和歌」から「短歌」へ呼び名が変わったことの背景を解説した。

資料5 正岡子規「十たび歌よみに与ふる書」より

歌は平等無差別なり、歌の上に老少も貴賤も無之候(これなくそうらふ)。歌よまんとする少年あらば、老人などにかまはず、勝手に歌を詠むが善かるべくと御伝言可被下候(くださるべくそうらふ)。  
正岡子規(明治31年3月4日)

「歌は平等無差別なり」、「牛飼い」だって歌を読む時代がきたという、「新派和歌」宣言の歌だと理解できる。しかし、一方で左千夫の歌は、「うし」「うた」「うた」といった韻を自然に踏んでおり、調べがなめらかで、和歌が大切にしてきた「歌は、意味だけでなく、音(韻律)も大切な要素である。」という考えは踏襲していることも説明した。

(4) 意味と音(韻律)

古典和歌では和歌は31音という捉え方であった。「歌を詠む」は、声に出して詠む、つまり、31音という考え方に立っている。これに対して、「歌を作る」は31文字という考え方に立っていることを説明。現在の中学や高校の国語教科書では、短歌は31音の詩だと説明されていることも付け加えた。

資料6 藤原俊成の和歌観「古来風躰抄」より

歌はただよみあげもし、詠じもしたるに、なにとなく艶にもあはれにも聞こゆることのあるなるべし。もとより詠歌といひて、声につきて善くも悪くも聞こゆるものなり。

藤原俊成の和歌観を示し、古典和歌では和歌は31音という捉え方であり、和歌は意味内容だけでなく、音(韻律)によって伝わるものが大きいこと、「歌を詠む」は、声に出して詠むことであり、音(韻律)によって、「善くも悪くも聞こゆるもの」であるとされていた。

伊藤左千夫の短歌に詠まれたように、短歌は和歌とは違い日常のどんな事でも素材となり、労働や日常生活の中から題材を見つけどんどん新しい歌を作ろうとしたのが、近代短歌であった。しかし、左千夫の歌は、韻を重ね、音の響きもよい歌であった。

(考察)

令和6年度は筆者にとって初めての市民文化講座であった。「分かりやすく親しみやすい」ことを第一に考え、近代以降の短歌から現代短歌までの流れを大きく捉えることを主眼とした。しかし、受講者にとっては、もう一歩踏み込んだ一首一首の鑑賞を聞きたい、自分たちでもやってみたいという気持ちがあったように感じた。受講者それぞれの方の、短歌との関わりやもたれている知識の違いがあり、易しく理解しやすかったという評価と、並べ替えは全く分からなかったという評価が混在していた。この反省もあり、令和7年度は、テーマを再検討し、2部構成として、休憩を挟むなどの改善を行なった。

2. 令和7年小松島市夏期文化講座実施内容

(1) ウォーミングアップ：次の和歌の作者は誰でしょう？

資料7 源氏物語の作中和歌3首の作者を考えよう

- A 大空をかよふまぼろし夢にだに見えこぬ魂の行く方 たづねよ
- B たづねゆくまぼろしもがなつてにても魂のありかを そこと知るべく
- C 限りとてわかるる道の悲しきにかまほしきは命なりけり

<ヒント>

- ・『源氏物語』の登場人物が作者です。
  - ・和歌の言葉をてがかりにして、考えてみましょう。例えば「魂の行く方」「魂のありか」「限り」等。どんな場面、状況かを考える手掛かりになります。
  - ・作者が予想できたら、次は、どの巻の和歌か、3つの歌の関係はなど、考えてみてください。
- ※知っていても言わない約束をお願いします。

(2) 前半：3首の作者、和歌の解説をして、源氏物語の1部2部の構成を俯瞰的に捉える。

**C 限りとてわかるる道の悲しきにかまほしきは命なりけり (桐壺更衣：「桐壺」巻)**

- 源氏物語の最初の作中和歌である。
- 桐壺更衣（光源氏の母）の歌は全編を通じてこの一首だけである。
- 紫の上の病が重くなったのも夏のことである。
- 病がちであったこと、帝が更衣の里さがりをなかなか許さなかったことなど、光源氏が紫の上の出家を許さなかったこととも重なる。周到な伏線であるとも。
- 贈答の歌ではなく、独詠歌。桐壺更衣が、自ら自分の思いを歌で帝に伝えるが、帝の返歌はない。
- 亡くなる寸前の歌。この後、里に退出しすぐに絶命する。
- 「いかまほし」は「行き」と「生き」の掛詞。
- 帝への思いを「形」ある「和歌」で残したとも。

**B たづねゆくまほろしもがなつてにても魂のありかをそこと知るべく (桐壺帝：「桐壺」巻)**

- 帝は釵負命婦を使いとして更衣の母を弔問させる。
- 近くに白楽天の「長恨歌」を題材とした屏風絵があり帝はそれを見て亡更衣を偲ばれる。命婦は更衣の母からの贈物（装束一領と御髪上げの調度）を帝にお見せする。
- 「長恨歌」：玄宗皇帝が楊貴妃の魂の在処を知りたくて、幻術士（まほろし）に依頼する。仙女になった貴妃とあった方士は、証拠の品として金の釵と青貝細工の香ばこ、2人だけしか知らない誓いのことば「天に在らば願はくは比翼の鳥となり、地に在らば願はくは連理の枝とならん」を持ち帰る。
- 帝は命婦の持ち帰った釵を目にして、この歌をつぶやく。釵を見ての連想は、更衣の魂はどこにあるのか、玄宗皇帝と同じ切実な思いである。
- 「まほろしもがな」の「まほろし」は「幻術士」。
- 桐壺巻冒頭の「長恨歌」との重なり、屏風絵、釵、桐壺帝の歌と「長恨歌」の世界を重ねながら物語が進行する。
- これは和歌の技法「本説取り」の先駆ともいえる。

**A 大空をかよふまほろし夢にだに見えこぬ魂の行く方たづねよ (光源氏：「幻」巻)**

- 桐壺巻の「尋ねゆく」（桐壺帝）の歌の「まほろし」をなぞるように、愛する人を喪った悲しみを幻術士によって少しでも慰めたい思い、あの世とこの世を繋ぎたい思いが描かれているのは、作者による「始め」と「終わり」のけじめが込められているのだろう。見事な構成である。（尾崎左永子「歌を味はふ」2012、小学館）
- 巻名 まほろしは冥界と現世界とを往来するという幻術士。源氏の歌「大空をかよふまほろし夢にだに見えこ

ぬ魂の行く方たづねよ」によるが、これは遠く桐壺巻の更衣を哀傷する帝の歌に呼応する。（古典セレクション源氏物語11、1998、小学館）

- 物語に埋め込まれた漢籍や古典和歌、先行の物語の記憶は、物語内部の記憶の連鎖とも重なり、平安中期の宮中を中心とした人々の文化や言語世界を現わしてくれる。
- 光源氏の歌は、さらに常世の使者である「雁」の姿を見て「翼を並べて飛ぶ姿を羨ましい」として詠まれている。父帝の歌と相呼応するだけでなく、楊貴妃を失った玄宗皇帝の嘆きとも重なり、多くの愛する人を亡くした悲しみの歌とも重なり繋がっている。

(考察)

ウオーミングアップは難しく、「えっ」という声があがった。近くの人と相談してと促してはじめて、源氏物語のあらすじなどを考え始めた様子であった。そこで、スライドで次の視覚的資料と原文を提示しながら、3首の解説を行なった。これは、これまでの発表者の継続研究の手法、視覚的資料（主に絵画）と原文を行き来しながら読むを取り入れたものである。学校教育から生涯教育への展開の試み。

**資料8 桐壺更衣と帝との別れの場面**



桐壺更衣帝との別れ 幻の「源氏物語絵巻」上巻絵第三段  
作者不明 縦35.4×横133.2(cm) 江戸時代前期 個人蔵

**資料9 髪結いのための道具（櫛や釵など）**



櫛や釵、鏡など髪を結い上げるための道具を収めた箱(御髪上げの調度)。桐壺更衣の形見として軽負命婦が帝に見せる。【加賀藩家抄録】から

資料10 桐壺更衣が退出の際に許された輦車



輦車 勅許を得た者だけが乗用できる、人力によって引く屋形車。桐壺更衣が退出する際、輦車に乗る勅許が下されたことは、帝の寵愛の深さを表す。『輦車図考』から

資料8から資料10のような視覚的資料の提示を、投影資料でも、配布資料でも行なった。これも、令和6年度の講座の反省から取り入れたものである。市民講座であり、普段から古文の原文に親しんでいる受講者もいる一方で、古典の原文に触れるのは、高等学校の卒業以来であった方も半数近くおられたためである。

資料11 桐壺帝の桐壺更衣への哀傷歌（『源氏物語』桐壺巻）当日資料より一部抜粋した。

このごろ、明け暮れ御覧ずる長恨歌の御絵、亭子院の描かせたまひて、伊勢、貫之に詠ませたまへる、大和言の葉をも、唐土の詩をも、ただその筋をぞ枕言にせさせたまふ（中略）かの贈物御覧ぜさす。亡き人の住み処尋ね出でたりけんしるしの釵ならましかばと思ほすもいとかひなし。

（帝）たづねゆくまほろしもがなつてにても魂のありかをそこと知るべく

絵に描ける楊貴妃の容貌は、いみじき絵師といへども、筆限りありければいとにほひすくなし。太液芙蓉、未央柳も、げにかよひたりし容貌を、唐めいたるよそひはうるはしうこそありけめ、なつかしうらうたげなりしを思し出づるに、花鳥の色にも音にもよそふべき方ぞなき。朝夕の言ぐさに、翼をならべ、枝をかさはさむと契らせたまひしに、かなはざりける命のほどぞ尽きせずうらめしき。

小学館『古典セレクション源氏物語①』の脚注を参考にして、該当箇所と「長恨歌」の関係を丁寧に説明した。

- ・かの贈物：更衣の母から帝に贈られた更衣の形見「御髪上の調度めく物」（櫛や鉗などの髪を結い上げる道具。帝がこれを見て、長恨歌を思い出し「しるしの釵ならましかば」と嘆ききっかけとなる。源氏物語「桐壺」巻冒頭の長恨歌との関係は言うまでもないことだが、A桐壺

帝の和歌は玄宗皇帝と楊貴妃の悲恋を踏まえ、玄宗の悲しみに自身の悲しみを重ね合わせて詠まれた歌である。

- ・まほろし：幻術士（道士）。玄宗皇帝は楊貴妃の魂のありかを道士に捜させる。
- ・しるしの釵：道士が玄宗の意を伝え形見に持ち帰ったのが青貝細工の小箱と金釵であった。

<比翼連理>

「翼をならべ、枝をかさはさむと契らせたまひしに、かなはざりける命のほどぞ尽きせずうらめしき」は桐壺帝の嘆きである。帝と更衣とが玄宗と貴妃にならって一心同体の愛情を約束したとする。長恨歌「在天願作比翼鳥在地願為連理枝 天長地久有時尽 此恨綿綿無尽期」に拠る。

「比翼連理」は現在でも用いられることのある四字熟語であり、長恨歌との関連から、古文漢文融合の教材ともなる箇所である。源氏物語をはじめ枕草子など平安中期の作品は漢籍の引用が多くみられ、影響も大きい。特に『白氏文集』は藤原公任『和漢朗詠集』をはじめとして人口に膾炙したものであった。和歌においても同様の影響が見られる。これらから、文学史的な視座を得ることができる該当本文箇所である。これをさらに、次の「幻」巻の光源氏の和歌と関連させて読むことで、「源氏物語」への流れ、「源氏物語」から新古今集をはじめとした後の文学への影響を具体として理解することができる本文箇所である。

資料12 光源氏の紫の上への哀傷歌（幻巻）

神無月は、おほかたも時雨がちなころ、いとどながめたまひて、夕暮の空のけしきにも、えも言はぬ心細さに、（源氏）「降りしかど」と独りごちおはす。雲居をわたる雁の翼も、うらやましくまもられたまふ。

（源氏）大空をかよふまほろし夢にだに見えこぬ魂の行く方たづねよ

何ごとにつけても、紛れずのみ月日にそへて思さる。

（解説）一周忌が過ぎ初冬を迎えて、源氏の悲傷は楊貴妃を失った玄宗皇帝の嘆きと重なる。それは、桐壺巻の父帝の桐壺更衣に先立たれた嘆きとも呼応している。

小学館（1998）の「幻」巻、巻名の項には「まほろしは冥界と現世界とを往来するという幻術士。源氏の歌「大空を（後略）」によるが、これは遠く桐壺巻の更衣を哀傷する帝の歌に呼応する。」とある。

源氏物語に埋め込まれた漢籍や古典和歌、これまでの先行する文学の記憶は、物語内部の記憶の連鎖とも繋がり、平安中期の宮中を中心とした人々の文化や言語世

界を現わしてくれる。脚注によると、「雁は常世の使者。それゆえ紫の上にも逢えるかと思うと、雁がうらやましい。一説に、翼を並べて飛ぶ姿をうらやましいとする。」光源氏の和歌は、父の和歌と相呼応するだけでなく、楊貴妃を失った玄宗皇帝の嘆きとも重なり、また愛する人を亡くした多くの人々の嘆きとも重なっている。

筆者は以前からこの桐壺帝の和歌と「幻」巻の光源氏の歌の関係に着目してきた。源氏物語の引歌についても同様である。源氏物語を知る、味わうにとどまらない、文学史的視座を得ることができる箇所であり、大きく捉えれば「文学とは何か」という「問い」に関わる答えのひとつの具体であると捉えているからである。

一方、光源氏の歌には桐壺帝の歌にはない表現がある。これに着目すると別の流れが浮かび上がる。「夢にだに見えこぬ」は、紫の上は夢にさえ現れてはくれないという光源氏の悲痛な述懐の言葉であろう。父帝の母への思いを歳月を隔てて理解できるようになった光源氏ではあったが、同時に、紫の上ひとりさえも幸福には出来なかったのではないかという後悔もある。「幻」巻には光源氏の述懐の言葉が多く記されている。明石の君との歌の贈答にも「雁」が詠み込まれている。明石の君の筆跡から光源氏は次のように紫の上の心中を推し量っている。「古りがたくよしある書きざまにも、なまめざましきものに思したりしを、(中略)またさりとてひたぶるにはうちとけず、ゆゑありてもてなしたまへりし心おきてを、人はさしも見知らざりきかし、など思し出づ。」紫の上の悲しみや慎み深さを今更ながら思い知っているのである。

「幻」巻は、高等学校や大学では難しいかもしれないが、生涯教育においては、様々な年齢の人生経験を積んだ人たちにとって、源氏物語を読むことを契機に自分と重ね合わせながら思いを巡らすことができる巻である。「幻」巻から、物語の記憶を改めてたどる読み方も今後は提案していきたい。

「夢」は源氏物語のキーワードのひとつであり、伊勢物語の影響が具体的に見える言葉でもある。伊勢物語69段の伊勢斎宮の歌をあげる。「君や来し我や行きけむ思ほえず夢か現か寝てかさめてか」。光源氏と藤壺の逢瀬の後の和歌にも「夢」が用いられている。「見てもまたあふよまれなる夢のうちにやがてまぎるるわが身とまがな(光源氏)」「世がたりに人や伝へんたぐひなくうき身を醒めぬ夢になしても(藤壺)」同じ「夢」を用いて、光源氏と明石の君は次のように和歌を詠み交わしている。「むつごとを語りあはせむ人もがなうき世の夢もなかばさむやと(光源氏)」「明けぬ夜にやがてまどへる心にはいづれを夢とわきて語らむ(明石君)」人物像を捉えるために作中和歌に着目する、それも「夢」というキー

ワードを手掛かりにという読み方も可能である。

受講者の感想は後述するが、普段、古文を読む機会がほとんどない受講者にとって、作中和歌や原文だけではイメージしにくく理解が難しかった。これは中高生でも同じである。そこで、絵画的資料や視覚的資料を提示しながら原文を少しずつ解説を加えながら読み解いていくと、受講者の興味が深まって原文の世界に入っていく様子が見られた。視覚的資料と原文を対照させながら読む手法は、生涯教育の場でも有効であったようだ。

ここまでが前半で休憩をはさんで後半に進んだ。

### (3) 後半：藤原俊成の美福門院加賀(定家の母)への哀傷歌

建久四年(一一九三)に定家の母である美福門院加賀が没し、その死を哀傷して、俊成は息子である定家や式子内親王と『伊勢物語』や『源氏物語』を踏まえながら歌を詠み交わしている。その一連の哀傷歌は、俊成の家集『長秋詠藻』に収められている。

#### 資料13 藤原俊成の美福門院加賀(定家の母)への哀傷歌(所収：『長秋詠藻』藤原俊成家集)

建久四年(一一九三)に定家の母である美福門院加賀が没し、その死を哀傷して、俊成は息子である定家や式子内親王と『伊勢物語』や『源氏物語』を踏まえながら歌を詠み交わしている。その一連の哀傷歌は、俊成の家集『長秋詠藻』に収められている。俊成は、『源氏物語』を踏まえて次のような歌を詠んでいる。

S 山の末いかなる空のはてぞとも通ひてつぐる幻もがな(長秋詠藻・俊成)

T 思ひかね草の原とてわけ来ても心をくたく苔のしたかな(長秋詠藻・俊成)

U 草の原わくる涙はくたくれど苔のしたにはこたへざりけり(長秋詠藻・俊成)

Sの結句「幻もがな」が『源氏物語』桐壺巻で桐壺帝が長恨歌を踏まえながら亡桐壺更衣の魂のありかを探しあててくれる幻術士はいないのかという悲痛な思いを詠んだ「たづね行く幻もがなつてにても魂のありかをそこと知るべく」を踏まえていることは確実であろう。また、TとUの「草の原」は墓所を表しているが、これも『源氏物語』花宴巻の朧月夜の君が詠んだ一首「うき身世にやがて消えなば尋ねても草の原をば問はじとや思ふ」に基づく語である。「草の原」は「六百番歌合」で問題となった一語でもある。俊成は『源氏物語』での桐壺帝の悲しみに重ね合わせるようにして愛妻を亡くした思いを詠んでいる。どんなに言葉を費やしたとしても、語り尽

くせるものではない思いの丈を『源氏物語』の世界を踏まえることで表現しようとしている。あるいは桐壺帝の歌を踏まえ詠む行為は、桐壺帝と悲しみを共有することであったかもしれない。この俊成の哀傷歌に應えるように『古来風躰抄』の下命者である式子内親王は次のような歌を贈る。

**資料14 式子内親王が俊成に贈った歌（所収：『長秋詠藻』藤原俊成家集）**

V おもかげに聞くも悲しき草の原わけぬ袖さへ露ぞこぼるゝ（長秋詠藻・式子内親王）  
 W 道かはる別れはさてもなぐさまじ魂の行方をそことつぐとも（長秋詠藻・式子内親王）

Vは、俊成のT・Uに應えるようにして詠まれた歌である。また、Wは、俊成のSを受けて、下句「魂の行方をそことつぐとも」は、『源氏物語』幻巻の光源氏の歌「大空を通ふ幻夢にだに見え来ぬ魂の行方たづねよ」を踏まえている。俊成が、言葉には尽くしきれない悲しみを『源氏物語』を本説とする歌を詠むことで、かろうじて表現しようとしたのに対して、式子内親王もそれに気持ち添わせるように、『源氏物語』を踏まえた歌を詠んでいる。また、式子内親王が踏まえた光源氏の「大空を」は、紫の上の一周忌が過ぎたころに、やはり長恨歌を踏まえ、そして、俊成がSで踏まえた桐壺帝の一首に呼応するように詠まれた歌である。式子内親王は、ただ単に俊成の『源氏物語』を踏まえたSに対して、『源氏物語』を踏まえた歌を詠んだのではなく、さらに細やかに、父、桐壺帝の悲しみに重ね合わせるようにして詠まれた光源氏の「大空を」を思い起こしながら歌を詠んでいるのである。

**資料15 藤原定家の哀傷の歌**

**母を偲び、邸が泣いている 藤原定家**

身まかりける秋、野分しける日、もと住み侍りける所にまかりて  
 玉ゆらの露も涙もとどまらずなき人恋ふる宿の秋風  
 （『新古今集』哀傷・788・藤原定家）

**『源氏物語』の影響を受けている**

\* 夕霧が紫の上を垣間見た場面、紫の上が亡くなったときにそのことを想起している場面が重ねあわされている。

これに加えて、藤原俊成と美福門院加賀の息子である藤原定家は資料15の哀傷歌「玉ゆらの露も涙もとどまらず亡き人恋ふる宿の秋風」を詠んでいる。この歌は、源氏物語で光源氏の息子である夕霧が紫の上が亡くなった時に、生前に一度だけ紫の上の顔を野分の翌朝に垣間見した日のことを踏まえて詠んだ哀傷の歌を踏まえている。定家は、息子の立場から同じ息子の立場である夕霧の立ち位置にたつて、母の死を悼む歌を詠んでいる。

ここに見られる、「本説取り」歌は、単なる技巧的な歌ではない。『源氏物語』の世界を媒介とながら、癒やそうとしても癒やすことができない妻や母を亡くした悲しみを、それでも何とかして伝え合おうとするところから生まれたものであると考えられる。

最後に、六百番歌合での藤原俊成の判詞「源氏見ざる歌詠みは遺恨の事なり」を紹介して、源氏物語が新古今和歌集の歌人たちの必読書となった経緯を解説した。

**資料16 藤原俊成「源氏見ざる歌詠みは遺恨の事なり」**

建久四年（一一九三）、定家の母美福門院加賀の没した後のことであるとされている『六百番歌合』の判において、有名な「源氏見ざる歌詠みは遺恨の事なり」の言葉を残している。冬上、一三番「枯野」を見てみよう。

左勝	女房
見し秋を何に残さん草の原ひとつに変わる野辺のけしきに	
右	隆信朝臣
霜枯の野辺のあはれを見ぬ人や秋の色には心とめけむ	

右方申云、「草の原」、聞きよからず。左方申云、右歌、古めかし。判云、左、「何に残さん草の原」といへる、艶にこそ侍るめれ。右方人、「草の原」、難申之条、尤うたゝあるにや。紫式部、歌詠みの程よりも物書く筆は殊勝也。其上、花の宴の巻は、殊に艶なる物也。源氏見ざる歌詠みは遺恨事也。右、心詞、悪しくは見えざるにや。但、常の体なるべし。左歌、宜、勝と申べし。

ここでの、女房（藤原良経）の歌の「草の原」の語、そして俊成のそれに対する言や「源氏見ざる歌詠みは遺恨事也」の言葉を、先の『長秋詠藻』所収の一連の哀傷歌（S～W）と関連させて考えると、この判詞は、俊成の『源氏物語』に対する並々ならぬ思い入れがあつたものであったことが理解される。

俊成の「本説取り」は、単に物語を踏まえて詠む、物語の登場人物になり代わって詠むというレベルのもので

はなく、物語を踏まえることによって、その情調や世界を一首の背後に揺曳させることによって、言葉では明示できない複雑で奥行きのある微妙な感情や心情を伝え合うことを可能にするというものであったと考えられる。

#### (4) まとめ：源氏物語から新古今和歌集への流れ

まとめとして、源氏物語の引き歌や作中和歌に着目することは、人物像の把握のために有効な方法であること。古典和歌世界との繋がりや新古今集など後世の和歌への影響といった文学史的視座を得ることにもなること。古典「長恨歌」の世界をただなぞるだけでなく、そこに父と子といった新たな視点を加味しているのが源氏物語であり、古典の変奏から創造へという物語の方法が見られることも「本歌取り」「本説取り」の技法に繋がっていったことを述べた。

現在でも古典の変奏としての沢山の新しい作品がうまれていること具体例として、別冊太陽『源氏研究からひもとく「あさきゆめみし」』というムック本を示しながら紹介した。大和和紀さんも国宝『源氏物語絵巻』や上村松園『焔』などから着想を得て源氏物語の世界を描いたという。和歌や物語に限らず、漫画やアニメも含んだ絵画的な世界でも古典を題材として新しい作品が続々と生まれていることを紹介した。

### 3. 小松島市夏期文化講座受講者の感想（抜粋）

発表者は令和7年4月より徳島県では最も古く歴史のある短歌結社「徳島歌人」の主宰をつとめている。月刊の歌誌に掲載された講座報告の中から一部を抜粋する。

#### 資料17 講座報告（所収：「徳島歌人」10月号 通巻第940号）

令和七年度小松島市夏期文化講座において本会主宰の眉村揺子氏が「『源氏物語』と和歌」というテーマで講義をした。令和七年八月五日火曜日、十三時三十分から九十分の講義で参加者は二十八名だった。開始予定よりも早い時間から多くの方が集まり関心の高さが伺えた。小松島市はもちろん、徳島市や阿南市、美波町、吉野川市、半田市からも酷暑の中お集まり頂いた方々にお礼を申し上げたい。会場では趣のある神田瀬川をバックに、眉村氏の講義がはじまり典雅な世界にいざなわれた。

今回、私が特に感銘したことは二つある。一つは、「源氏物語絵巻」の美しさである。眉村先生に解説をしていただきながら、じっくり観る機会が又あればいいなと思った。もう一つは、『源氏物語』を含めた古典の奥深さだ。千年以上も前の物語の和歌に、現代の私たちが向き合っている奇跡。「長恨歌」を下敷きに

して『源氏物語』の和歌が詠まれ、俊成や、定家や式子内親王がまたそれを踏まえて「本歌取り」をし「本説取り」をしていくという、脈々と続くものへの畏怖の念を禁じえなかった。

私たちが詠んでいるのは現代の短歌であるが、古典を紐解くことでまた新たな歌が詠めそうな予感がした。（編集委員）

編集委員からの報告ではあるが、現在短歌作りをしている者にとっても、古典から現在まで脈々と和歌や短歌が読み継がれており、それを知りその継続性を知ることによって、新しい現在の短歌が詠めそうな予感がしたと記している。これが本稿の題目でもある「言語文化の持続性の感覚を直に獲得する」古典の学びと言えるのではないか。やはり繋がっているその「持続性の感覚」は、現在だけを知っているのでは生まれてこない。歴史が積み重なって現在があり、現在を過去からみる視座を得ることは未来を考えるうえで極めて有益なものの見方、考え方であるというのと同様である。

#### 資料18 講座の感想（所収：「徳島歌人」10月号 通巻第940号）

桐壺帝が桐壺更衣を亡くした時の歌と、光源氏が紫の上を亡くした時の歌を、重ねている（まるで贈答歌の様に）。それも長恨歌を下敷きとして。改めて紫式部の構想の大きさに、感動しました。それを教えて下さった眉村主宰にも、感謝です。

源氏物語の影響は、藤原俊成にまで及び、「長秋草」の中で、妻を亡くした悲しみを、桐壺帝や光源氏の歌を、本歌取り風に詠んでいる。それを、初めて発見した時の喜びが、込み上げて来るのか、眉村主宰の嬉しそうなお顔は、少女の様でした。源氏物語が、後世の歌人たちに、いかに大きな影響を与えたことか！驚くばかりでした。

酷暑の中であつたが、文学の世界を覗くことが出来て、有意義な一時間半でした。（徳島市Oさん）

「本説取り」初めて聞く言葉でした。なるほど感慨深かったです。私たちも影響を受けた小説や古典文学から歌にすることってたまにあるので、（全くの無知でとても浅い歌ながら）通じるものがあるなあと感じたり。90分があつという間の楽しい講義でした。（吉野川市Tさん）

ウォーミングアップで、「えっ！」とつまずきました。というのは、かつて、源氏物語を読んだ時、そのストーリー性や自然の描写、登場人物の気持ちを反映する様な気候などを読み取るのが、精一杯で、和歌については深く読み取る余裕がなかったのです。作中和

歌三首だけを取り出しての解説をしてくださり、なるほど登場人物の気持ちを深く、その後の主人公の生き方も眺める事が出来、又、当時の時代背景まで見る事が出来るとは！と和歌の素晴らしさを改めて知りました。(徳島市Kさん)

Tさんの、「私たちが影響を受けた小説や古典文学から歌にすることってたまにあるので」の記述も、現在の自分の歌作りにおいても、「本説取り」「本歌取り」ということは行なわれていると改めて、歌を作り出すプロセスを捉え直しているのが分かる。この行為を、別の角度から捉え直す、いわば無意識に行なっていることが、実はこういう事であったとメタ認知することも貴重な学びである。

次の資料19は、現在メンバー5人で源氏物語を読む会に参加している会員の方に、寄稿を依頼して書いていただいたものである。

**資料19 現在源氏物語を勉強会で読んでいる受講者の感想 (所収：「徳島歌人」10月号通巻第940号)**

(前略) 前半は、「『源氏物語』の作中和歌から、第一部、第二部の構成を俯瞰的に捉える」というテーマだった。和歌の「まほろし」や「魂のありか」「魂の行く方」というキーワードから、物語が「長恨歌」の世界と重なりながら進行していくこと、そこに「本歌取り」「本説取り」の源流があること、桐壺帝の和歌と光源氏の和歌が第一部の「始め」と「終わり」のけじめをつけた見事な構成であることなどがわかり、感動した。そして、『源氏物語』の作中和歌に着目して読み解くことの大切さや面白さも感じた。後半は「『源氏物語』の作中和歌を踏まえて、新しい和歌が詠まれ、新古今和歌集の代表的な技法「本歌取り」「本説取り」となった」ということについて、藤原俊成の家集『長秋草』に収められた哀傷歌を紹介してくださった。美福門院加賀(定家の母)の死を哀傷して俊成と式子内親王が詠み交わした歌は、『源氏物語』を踏まえていることを知って読むと、より切なく味わい深い。

山の末いかなる空のはてぞとも通ひてつぐる幻もがな (俊成)

道かはる別れはさてもなぐさまじ魂の行方をそことつぐとも (式子内親王)

この「本説取り」歌は、『源氏物語』の世界を重ねることで、人を亡くしたときの複雑で奥行きのある細やかな心情が伝わってくる。「大切な人を亡くした悲しみを、自分だけではない、と乗り越えることができるのが物語の働きではないか」と話されたことが心に

残った。藤原俊成の研究をされた先生の貴重なお話だった。

最後に古典が常に新しいものを生み出し、時代とともに成長し続けていることの例として「大和和紀『あさきゆめみし』と源氏物語の世界」(別冊太陽)を紹介してくださった。先生が紹介してくださる本はいつも面白い。源氏の仲間に、いただいた資料とこの本も紹介して、講座で学んだことを伝えたい。

筆者は、興味のある新しい書籍を都度で紹介することになっている。今回の配布資料も仲間と共有して、書籍の紹介もしてくださっている。今回紹介した「大和和紀『あさきゆめみし』と源氏物語の世界」(別冊太陽)は、源氏物語や源氏物語絵巻の研究者が、大和さんの漫画を研究対象として自身の研究領域と絡み合わせながら、論文ではなく読みやすい形で、あさきゆめみしを論じ文章化したムック本である。言語作品を対象に論じてきた研究者がそれと関係させながら、大和さんの描いた作品を論じていく。とても読み応えのある書籍であった。古典への垣根を低くしながら、本質的なもの、質は落としていない。こうしたものを取り入れながら、古典と新しく創り出される作品の関係にも目を向けていけたらと考えている。

**4. おわりに**

本稿では、筆者自身が実践した市民講座を分析考察の対象として、生涯教育の場から小中高の学校教育へとこのこれまでの発表者の研究とは逆方向の試みについて報告した。

現在は、地方における文化活動が以前よりも活発になったように思われる。交通手段の発達も、通信情報システムの発達も相まって、地方でも文化的なものを受信するだけでなく、発信する機会も増えてきている。また、民間でも行政でも、そういった文化活動に力を入れている。

筆者が主宰をつとめている短歌結社でも、県外の会員が少しずつ増えている。メールやLINEでのやりとりも投稿の方法として定着している。以前は転勤等で県外移住となれば、会を離れることが多かったが、現在では会に在籍して、県外での生活や食文化、人との関わりを短歌にして発表してくださる会員も存在する。東京一極という状況は文化的にも変化の兆しが見られる。

また、学校教育と生涯教育との関係にも変化が見られる。筆者が副会長をつとめている県歌人クラブでも小中高との連携を行ない、出前授業なども実施している。筆者が発行する月刊誌でも、あまり多くはないが、小中高生の短歌掲載も行なっている。文化の持続性の感覚を直

に獲得することで、日常の言語生活を豊かにしそれを創作活動にも繋げていくことは、大きくいえば、子どもたちを含めた、言語共同体の言語生活を豊かにしていくことに繋がっていく。

これからも、生涯教育の場からも、学校教育における提案を行なっていきたい。

<引用・参考文献>

- 1) 佐野みどり (2000) 『じっくり見たい「源氏物語絵巻」』小学館。
- 2) 阿部秋生ほか校注・訳 (1998) 『古典セレクション 源氏物語①』小学館。
- 3) 視覚的資料は、秋山虔監修 (2012) 『週刊絵巻で楽しむ源氏物語 1 桐壺』朝日新聞社より。
- 4) 松野陽一ほか編著 (2007) 『藤原俊成全歌集』笠間書院。
- 4) 別冊太陽『源氏研究からひもとく「あさきゆめみし」』。